

| | |
|------------------|---|
| Title | アリストテレスの問題法とヘーゲルの辯證法 |
| Sub Title | |
| Author | 青木, 巍(Aoki, Iwao) |
| Publisher | 三田哲學會 |
| Publication year | 1932 |
| Jtitle | 哲學 No.9 (1932. 4) ,p.133- 170 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000009-0133 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アリストテレスの問題法と

ヘーゲルの辯證法

青木 嶽

一

ニコライ・ハルトマンは、千九百二十三年五月二十二日の獨逸哲學會の會合に於て、『アリストテレスとヘーゲル』なる一講演を試み、ヘーゲルの歴史的理解の一つとして、アリストテレスよりヘーゲルを學び、且つ同時に、ヘーゲルよりアリストテレスを理解せんと企ててゐる。而して、彼は、この兩思想家を、方法の根本要素論理學と存在論との關係、及び目的論的形而上學、なる三方面に於て『結合せる』ものと見做してゐる。此講演はハルトマンらしき才氣に満てるものであるが、吾人

は、此處にその第一部を構成せる *Grundelemente der Methode* に於ける兩思想家の關係を、ハルトマンを通じて、再吟味せんと欲するのみである。蓋し、ハルトマン自らも此第一部に於て中心的命題が最も明瞭であり、その並行性に於て最も偶然的ではあるが然も歴史的理解にとつては決定的であると言つてゐるのみならず、吾人は、更に進んで、此部の再吟味によつて、哲學の方法を中心としてアリストテレースとヘーゲルの關係を明白にせんと欲するからである。然も、吾人はこの再吟味に依つて、結局、ハルトマンによるアリストテレースのヘーゲル化なる過誤を指摘する事になるであらう事を、豫め此處に表明して置き度い。従つて、此處では、アリストテレースがその *Topics* に展開せる所謂 *ディアレクティカル辩证法* は、本質的には、問題の焦點に入り來らないであらう。蓋しアリストテレースに於けるディアレクティケーとは、嚴密なる科學の方法と對照して、後者の出發點たる前提が直接的にして眞なるに對し、單に蓋然的なる憶測を前提として出發する推理の一形態を意味するのみであり、アリストテレースの哲學方法は、彼の「形而上學」「自然哲學」其他に於て、彼にとつて最も本質的に哲學的な諸問題を取扱へる箇所を、直接に考

察する事によつてのみ、獲得され得るからである。

二

先づ初めに、ハルトマンの議論の要綱を略述する事が便利であるのみならず、必要であると想はれる。

『方法の或る根本要素』と題する部門の冒頭に於て、ハルトマンは、アリストテレスに於ける諸科學一般の方法論を考察し、其處に所謂具體的普遍者なる考への有る事を摘出し、以て(一)『一の眞にヘーゲル的な命題】*Jeine echt Hegelsche These* を發見すると断じてゐる。此部に於ける彼の議論も詳細なる検討——重要な命題なるが故に——を受くべき運命を有つてゐると考へられるが、吾人は今これに觸れずして、彼と共に此部を『唯單に一つの *Aufklkt* に過ぎない』として進む事とする。

問題は、アリストテレスの哲學の方法である。處で、その哲學の方法なるものは、ハルトマンに依れば、——此主張は彼の近著(二)「ヘーゲル」中にも繰返されてゐるのであるが、——其方法を活用せる哲學者自身によつて元來意識的に展開さるべ

き性質のものではないと言ふ。(三)『何人も自らの勞作に用ふる方法をその原則に於て見抜かないものである。方法意識は、活用されてゐる方法と比較して見て、常に第二次的である。活動してゐる方法の前には、如何なる「純粹なる方法思惟」も無く、此意味に於て、如何なる先天的方法意識もない。』アリストテレスもヘーゲルもこの例外ではない。然らば、アリストテレスが斯く方法意識を云はゞ超越して活用したる眞の彼の哲學方法とは何か。即ち、それは彼の問題法 *aporetik* — 寧ろ、*aporetische Methode* と言つた方が正確であらうが——である。實に、(四)『アリストテレスに於ては、諸アポリアイの探求と解明が正に根本的方法となつてゐる。』然も、これらのアポリアイは全然それ自身の爲に討究されてゐて、その探究は、全然何等かの纏りたる積極的學說の擁護の爲にされてゐないのである。従つて、此方法は、個人的な信念或は形而上學的立場等より獨立せるものであつて、誠にこの方法そのものこそ、(五)アリストテレスの思想に於て、凡ゆる理論、凡ゆる命題及び哲學的教説の此方に在り、故に、これらと共に存立し、消滅したりしないものである。』アリストテレスの哲學の不滅性を求むるならば、人は正にこの方法そ

のものに於て之を求むべきである。言はゞ、この『方法論的無目的性』methodologische Zwecklosigkeit にそれを求むべきなのである。

然るに、アリストテレースの問題法は、飽迄（六）『非結合的なる非思辨的なる問題分析』であつて、此點よりしては、彼の問題法は、（七）あらん限り非ヘーゲル的である。』

然らば、何處に、彼の問題法がヘーゲルとの接觸を示すかと言ふに、個々の哲學問題の問題法的展開が（八）『殆んど常に内的なる矛盾の發見に導いてゐる』と云ふ點に於てゞある。所謂アンティノミーの發見に導く點に於てである。此點こそ、まさにアポリアの頂點 Gipfel である。例へば、アリストテレースの質料、形相等の形而上學的原理の分析、「自然哲學」に於ける運動の分析、「デ・アニマ」に於ける『第一の極在』なる概念、「形而上學」の顯在の問題法、及び primus motor の考へ方、等に此方法が明確に示されてゐる。而して、（九）『恐らく人はこの方法を Dialektik とより以外にはうまく稱ぶ事が出來ないであらう。』然も、如上の諸概念が彼の形而上學に於ける最も根本的な基礎概念なる事を想へば、辯證法がアリストテレースの思想に於て中心的地位を占めてゐると云はなければならぬ。（十）『人は、問題法によつて展

開されたるアンティノミーが不可解決であると言ふも、或は、唯辯證法的にのみ解決され得ると云ふも、全々同一である。辯證法的解決とは、まるに實際のザッハフ＝ヤハルトに於ける矛盾の *Gelassen* 以外には成立し得ない。此意味に於て、人はアリストテレスが根本に於てディアレクティカーであると云ふべきである。』斯くて、アリストテレスの方法は結局辯證法であり、否。(十一)『極めて屢々解決の存せざる場合に解決を歎き示すヘーゲルの辯證法』よりも、遙かに深き且つ必然的意味に於て、辯證法である。

更にアリストテレスの *Syllogismus* に於ける媒介の機能によつて、彼の論理學は辯證法の境界線に接近して居り、その媒介こそは、シロギスムスに於ける辯證法的契機と稱し得る。ヘーゲルの辯證法は、アリストテレスの *statische Logik* に対し、明かに *dynamische Logik* である。併し、辯證法の流れと雖も、その中に種々なる『切斷若くは停頓』 *Einschnitte oder Zäsuren* を許し得ざるものではなく、寧ろ、流動性が或程度迄把握され得るのは、これに於てであつて、斯かるものを認めざれば、辯證法的進行は、全然捕捉され得ないであらう。此處に、靜態論理學と動態論理學の接合點

が見られないであらうか。

抑も辯證法なるものの本質を（十三）『措定——反措定——綜合の三段階に於て見るのは、一の根本的に顛倒せる見解である。』斯かる見解は、外面的形式なる點に於ては、極めて適切であるかも知れないが、本質的洞察では決してない。方法そのものは、極めて複雑であつて、内容によつて變化して居り、此流れに於ける各契機は相對的となつて居り、或意味で反措定なるものが、他の意味に於ては措定となつて居るのみならず、綜合し得られぬアンティノミーも存在し得るのである。寧ろ、解決し得るアンティノミーは眞のアンティノミーでは決してない。（十三）『従つて、凡ゆる二律背反的なものを綜合に導いて出る事に、辯證法の意義は全然存し得ないのである。』 Im Hinausführen alles Antinomischen auf Synthesen kann also der Sinn der

Dialektik keineswegs liegen. ヘーゲル辯證法の偉大さは、まさにこのアンティノミーの曝露にあると言はなければならない。此點に、又、アリストテレースとヘーゲルの結合點が發見される。（十四）『縦し問題法と辯證法とがそれ自らに於て如何に異つてゐやうともこれら兩者が結果としてある所のものは、尙ほ原理的に同一である。

即ち、アンティノニーの曝露とその積極的評價。』

大體以上の論述によつて、ハルトマンの哲學方法を中心としてのアリストテレン
一派とヘーゲルの關係に對する理解の一瞥を終る事とする。

- (1) N. Hartmann, Aristoteles und Hegel, Beiträge zur Philosophie des deutschen Idealismus, Band 3, Heft 1, S. 4
- (11) N. Hartmann, Hegel, e. g. S. 162
- (III)(E) Aristoteles und Hegel S. 5
- (H)(K)(P)(K) Ibid. S. 6
- (P)(+)(+ 1) Ibid. S. 9
- (+ II)(+ III) Ibid. S. 11
- (+ IV) Ibid. S. 12

III

アリストテレンの哲學方法が所謂アポレティクに在ると云ふ限りに於て、ハルトマンは誠に正しい。確に、アリストテレンは、本格的に哲學的な思索を行へる場合には、常に此方法によつてゐるからである。斯くして吾人に課せられた第一の問題は、アリストテレンの——ハルトマンのではない——アポレティ

クを正鵠に把住する事であらう。

ハルトマンは既に述べたるが如く、アリストテレスにもヘーゲルにも當嵌まる事として、常に方法意識なるものがその方法そのものの活用に對し、セクンデールであると力説してゐる。(1)『若し彼ヘーゲルが辯證法に於て述べ得たる僅かの事を辯證法そのものの豊富さに比較するならば、彼も亦、――アリストテレスも同様――彼が活用せし方法を、自らその本質に於て見抜いたと云ひ得るが如き、正當なる方法意識を有したなかつた、と云ふ事に就て、人は疑を懸け得ない。』と云ふのである。而して、斯かる哲學者達の亞流が『方法の形骸』 das Skelett der Methode を云はゞ捏造するのであつて、Altmeister 自身は、その用ふる方法を『解剖的に』意識してゐる。(2) Im philosophischen Denken mag die Methode erste Bedingung sein, aber nicht erstes Gedachtes oder Gewusstes. Methoden=Bewusstsein ist notwendig das Letzte und Abhängigste in ihm. ～主張するのである。然し此事は、ヘーゲルに就ても如何かと思はれるが、アリストテレスには當嵌らない主張である。何故かならば、彼は、個々の哲學問題の問題法的展開に先づて、問題法そのもの、及びその必然性を簡単にではあるが、最

も明確に概説してゐるからである。即ち「形而上學」第二章の冒頭が正にそれである。「形而上學」第一章は、——二部に分割し得るが——言はゞ學的知識の本質論とも稱し得るであらうが、その第二章は、第一章の終末に表明されたる（三）「學的知識とその方法と同時に探究する事は不合理なるが故に、先づ人は、如何様にヨミ各個の事柄を承認しなければならないかを、（換言すれば、研究の方法を、譯者註）前以て既に教育されてゐなければならぬ。』との信念の下に、書き初められてゐる。吾人は此處にアリストテレースの問題法論が、彼の方法意識が、最も直截に敍述されてあるのを見る。即ち以下彼の述ぶる所を見やう。

(四) 研究せらるる學に關しては、先づ吾人は、最初に困惑せざるを得ないものを處理しなければならない。併しこれらは、或人達が第一原理に就て異つた風に色々抱いてをつた見解及び、それら以外のもので、偶々見逃されて終つたと云ふが如きものである。難問を切抜けんと欲する人達にとつては難問に完全に且つうまくぶつつかつて行く事 *πιναπορθηται καλῶς* が有效である。蓋し、後の容易は先の難問の解決であり、結び目を知らざる人は解く事が出來ないから。然るに吾人の思惟の

アポリアは、物につき纏ふこの結び目を明示するのである。何故かならば、難問に逢着せる思惟は、まさに縛られる者に等しい状態にあるから。何れも共に前方に進み得ないからである。故に人は、先づ豫め、凡ゆる難點を觀察して居らなければならぬ。以上の如き理由の爲のみならず、又、先づ最初に難問を漏れなく掲げずして研究に進む人々は、何處に行くべきかを知らざる人々に同じであると云ふ事にもよるのである。加之、果して求められるものを何時かに發見したるか否かもも知らないからである。蓋し、斯かる人々にとつて、目的が明確ではないが、難問を豫め論究したる人にとつては明確である。』

これは、實にアリストテレースの方法論、方法意識の表現以外の何物かであらうか。特に、以上の章句が『形而上學』第二章の冒頭を飾れる事に留意し度い。アリストテレースは、以上に於て、明白に、如何に哲學すべきかの途を示してゐるのであつて、然も、既に引用したるが如く、研究そのものよりも研究の方法の教育訓練がプリメールでなければならぬ *τεχναιαδεσμοθεατης* と主張してゐるのである。

併し、誠に、『より重要ではない』と言ふ意味に於て、方法意識を方法そのものの活

用に比してセクンデールなりとするハルトマンの見解に従つて、方法意識存在の詮索はこれに止め、吾人も論を進めて行かう。

- (1) N. Hartmann, Aristoteles und Hegel, S. 13
- (11) N. Hartmann, Hegel, S. 162
- (III) Aristoteles, Metaphysica, 995^a 12
- (四) Ibid. 995^a 24 ff,

四

最も本格的なる哲學諸問題の問題法的展開ではないが、最も明確な形態に於けるその展開を、吾人は「形而上學」第二章に於て發見し得るが故に、以下暫く其章に従つて或點迄進む事とする。此章は、概括して十四の所謂アポリアイの展開であると言へる。

先づ第一のアポリアは、凡ゆる原因 *aitia* 或は原理 *ἀρχή* を残り無く研究する事が、一科學のなし得る事であるか否かとの問題である。處で、それらの原理が相背反

せるものであれば、一科學に屬するであらうが、之等は寧ろ相異せるものであるから——例へば運動と質料の如く——如何にして一科學がよくそれらを全て把握し得るか。又、總ての原理が残りなく關係してゐないと云ふ様な事象も多いのであるから、一科學が凡ゆる原因原理を研究する事は不當であらう。例へば、不變なる事物に運動因なるものは無關係であつて、數學は、此故に、その論證に當つて目的因を用ひないのである。之に反し數個の科學が原因を研究するとせんか、吾人は、その何れが吾人の目指せる科學なるか、困惑せざるを得ないであらう。換言すれば、如何なる原因の知識が最も目指すべき眞の學問なるか疑ひなきを得ないであらう。蓋し、物には、例へば家には、運動因、目的因、質料、形相の四原理が働いてゐると考へ得られるからである。所で、これらの原理のうち、目的因の知識が最も權威あるものとして、萬人の、奴隸の女でさえも、指摘する處であらう。併し、最高の意味に於て、學問らしき學問としては、形相の學問なる實體 ^{ヨーロッパ} の學問を擧げるに躊躇し得ないのである。蓋し、人は、物の本質を、即ちそれが何であるかを、知る時その性質分量等の他の範疇に關聯して知るよりも、最も充分な知識を有つと云へるから。

然し、第三に、變化、生成に關しては、運動因の知識が求めらるる學問となるであらう。斯かる次第であるから、吾人は、寧ろ、之等諸原理を諸科學が個別的に研究する事が、至當とも考へ得るのである。

第二のアボリアは、萬人がその論證の根據となす所の、云はゞ普遍的信念とも稱すべき、矛盾律の如き論證の出發點 *point of departure* を研究する學問と、實體の學問とは一つであるか、或は別個のものであるか、との問題である。又、別個の科學なりとすれば、その何れが現に求められつゝある學問であるか、との問題である。先づ實體と論證の原理を、共に一つの科學が、例へば幾何學が、特に研究すべきである、と言ひ得べき理由はないであらうから、此二個の研究對象が、一學問の對象ではあり得ないと云ひ得る。斯くて、その研究は、凡ゆる科學に等しく屬し、個々の科學の對象たり得ないが故に、論證の原理研究は實體の學問に屬し得ない事となる。然し、一面より考へて、一體第一原理の學問等と云ふが如きものがあり得やうか。第一原理の眞理が論證さるとすれば、第一原理そのものは、明かにその根據となる一層根元的な類の偶屬性と見做さるべき、斯くして、全ての論證的科學が第一原理

を採用するのであるから、凡ゆる證明され得る偶屬性は、一個の普遍的なる類の偶屬性となるであらう。その結果、凡ゆる科學が結局一個の科學と化する事になり、不當である。儲て、然るに、實體學と第一原理 *aitiētē* の科學とが別個のものなりとすれば、その何れが本質的により權威あり、より先行的なるものであるか。又、第一原理は最も普遍的なるものにして、且つ言はゞ萬物の原理であるが故に、これらに就ての眞偽を検討する事は、所謂哲學者 *philoſophos* の任務ではないか。

第三のアポリアは、凡ゆる實體が一科學によつて研究さるるか否かの問題である。先づ、然らずとせんか、形而上學は、如何なる實體を研究すべきかの問題が生じて來る。反之、一科學が凡ゆる實體を研究するとせば、凡ゆる偶屬性を論證する一つの科學が存する事となるであらう。

第四のアポリアは、實體學が同時に偶屬性 *aitiētē* を研究するか否かの問題である。若し然りとすれば、實體學は數學の如き論證科學となるであらう。併し、實體の論證は存在しないと考へられてゐる。又否とせんか、實體の偶屬性を研究する學問が何であるか、と言ふ誠に容易ならざる問題が生じて來る。

以下、アリストテレスは、斯くの如きアポリアを尙ほ十餘枚舉してゐるのであるが、吾人現前の課題が、アリストテレスの問題法の把住にあるのであるから、彼のアポリアイの展開は以上で一先づ打切つて、今暫くその方法そのものに就て考察するがよいと想はれる。

之等の諸アポリアイの展開に直面して、人の最初に注目すべき事は、その各々のアポリアの敍述の中に、確に普通の意味に於ける——ヘーゲルの意味に於てではない——所謂 *These* と *Antithese* の對立を指摘し得る事であらう。例へば、第一のアポリアに於けるテーゼは、一科學が凡ゆる原因原理を研究し盡し得るものでないとの命題であり、アンティテーゼは、諸原因を數個の科學が個別的に研究する事は哲學が如何なる原因原理の科學なるかに就て、困惑を生ぜしめるとの命題である。第二のアポリアに於けるテーゼは、實體學なる形而上學は同時に論證の第一原理の學問ならずとの命題であつて、アンティテーゼは、實體學とアキシオーマの科學とが別個のものなりとすれば、その何れが、より權威ある學問なるか迷はざるを得ない。寧ろ、實體學者こそアキシオーマをも研究すべき最適任者ではないか

との命題である。第三のアポリアに於けるテーゼは、凡ゆる實體は一科學の研究すべきものであるとの命題であつて、アンティテーゼは、一科學がよく凡ての實體を研究し得ないとの命題である。第四のアポリアのテーゼは、實體學が同時に偶屬性學ではないとの命題であつて、實體學が同時に偶屬性學でなければ、實に容易ならざる問題を生ぜしめると云ふのがアンティテーゼとなつてゐる。

人は、此處に、アリストテレスの問題法に於けるアンティノミーを強調せるハルトマンを正しく想ひ起す事であらう。唯併し、吾人は、アリストテレスの問題法に於けるアンティノミーが、ハルトマンの稍どもすれば力説せんとせるが如くに、決して解かれ得ざるアンティノミーでもなく、寧ろ、一律的に解決さるべきアンティノミーなる事を指摘しなければならない。アリストテレスの問題法は、(二)『吾々自身にとつてより知られたるものより(出て)、その本質に於て知られ得るもの

*εἰς τῶν αὐτῷ γνωριμωτέρου τῷ φύσει γνώριμα αὐτῷ γνάριμα*たらしめる事に存するのであつて、單にものの本質に於ける所謂アンティ

ノミーを提示する事ではない。此事は、以上の第二章より更に進んで「形而上學」に従つて行く事によつて、おのずから明白となる。即ち、アリストテレスは、以上第二章に掲示したるアポリアイの各々を殆んど光明に解決してゐるのである。例へば、第一のアポリアは「形而上學」第三章に於て、「存在としての限りに於ける存在」*τὸν ἔστιν* を研究する形而上學が、凡ゆる原因原理を究めるものである、と主張する事によつて、解決されてゐる。第二のアポリアも、同章に於て、形而上學が存在の原理と共にアキシオーマをも研究するとの断定によつて、解決されてゐる。同様に第三のアポリアは 1004^a2—9 に於て、第四のアポリアは 1003^b32—1005^a18 に於て、何れ一律的に解決されてゐるのであつて、以下の十餘のアポリアイに就ても、何れもその明確な一律的な解決を指示し得るのである。アリストテレースにとつて、哲學は結局断定的——ヘーゲル流に言へば固定的規定的と言ひ得るであらう。——であつて、單なる批判的なそれではない。それは彼の所謂ディアレクティケーである。(1) *εστὶ δὲ γὰρ διαλεκτικὴ περὶ τῶν γὰρ φιλοσοφίᾳ γνωριστική* 哲學の方法は問題法であるが、——勿論、此外に人は歴史的方法、目的論的方法、消極論證的方法等を

も指摘し得るであらう。——問題法は、一定の歸着點なくしては、アリストテレスに於ては、その意義を失ふと言ふべからざである。(三)ハルトマンは、アリストテレスのアポレティクをプラトン的に理解してゐるが、寧ろ、プラトン的なヨローツクは、此處ではデイアレクティケーに墮してゐると云はなければならない。ハルトマンは、アンテイノミーの發見がアポリアの頂點であると言ふが、寧ろ、そのアントノミーの第三段階に於ける——綜合に於てではない——解決こそアポレティクの頂點と稱すべからざであらう。此意味に於て、アリストテレスの問題法は、カントのディアレンクティクに接近してゐると見られる。而して、以上の點は、他の何人を俟つ迄もなく、ヘーゲル自らが、その哲學史の講義に於て、明白にしてゐる所であつて、人は彼の正當なる斷定を肯定すべきである。Es ist dem Aristoteles gar nicht darum zu thun, Alles auf eine Einheit, oder die Bestimmungen auf eine Einheit des Gegensatzes zurückzuführen: sondern im Gegentheil jedes in seiner Bestimmtheit festzuhalten, und so es zu verfolgen.

(1) Metaph. 1029b 7

- (II) Ibid. 1004b 25
- (III) N. Hartmann, Platos Logik des Seins, S. 457
- (IV) Hegel, Vorlesungen über die Gesch. d. Philos., Glockners Ausg, S. 314

五

次にヘルトマン自身もその一つの好例として擧げてゐる『形而上學』第八章の潜在と顯在に關する思索に就て、其處に問題法が如何に活用されてゐるかを見る事とする。

存在は、一面に於て潜在 *δύναμις* と極在 *ἐντελέχεια* に分たれ得るから、今それらを論述せんに、先づ最初に、嚴密なる意味に於ける潜在を考察するであらう。潜在とは、本來或種の根元 *ἀρχαί* であつて、第一義的なる潜在とは、『他物に於ける變化、或は物それ自らの中にも於ける他物としての變化の根元』である。第二義的に潜在とは、他物によつて或は他物としての物それ自身によつて働きかけられる、或は變化される可能性、及び、他物によつて、若くは他物としての物それ自身によつて惡しき方、或

は破壊へ向つて、變化され得ない性質である。斯くて、働きかける可能性と、働きかけられるそれは、明かに一面に於ては同一であるが、同時に他面に於ては異なるものである。蓋し、或場合には、以上の『根元』が内在するが、或場合にはそれが外來的であるによる。而して、潛在には合理的なるものと、非合理的なるものとが考へられ、前者は、例へば醫術が病氣と健康とを共に作り出し得るが如く、相反對せる結果の可能性であるが、後者は、例へば熱が暑さをのみ産み出だす如く、一方的結果のそれである。

メガラ學派の如きは、例へば現に建築しつゝある人のみ建築の可能性を有するのであつて、顯在のみがあり得ると主張してゐるが、之は明かに謬見である。何故かならば、第一に、例へば建築術に就て云はんに、建築家が一時的忘却或は疾病等の爲に、建築術そのもの——これは破壊すべからざる不滅性を有つてゐる。——を實行せずして後間も無く再び建築する事があるが、之は如何に説明せんと言ふのか。結局斯かる見解は、プローテゴラス流の思想と合流するのであつて、人は、一日のうちに幾度となく盲目になつたり、聾者になつたりする事となるであらう。第

二に斯かる見解は變化生成を不可能ならしめる結果を招き、例へば現實に立つてゐない者は立ち得ないと云ふのであるから、座れる者は永久に座つてゐると云ふ事になるであらう。

斯かる不合理を避けんが爲に、吾人は、潛在と顯在とを區別しなければならない。ものの潛在とは、そのものが顯在を有つ事を防ぐる何物もない時に言ふのである。更に例へば、正方形の對角線はその一邊を以て測られ得るが、測られないであらうと云ふが如きは正しくない。これ、顯在を防ぐるものあるにも拘らず、その潛在を主張するによるのである。同時に、Aが有ればBも有らねばならぬとすれば、Aが有り得ればBも亦有り得なければならぬ。顯在あれば潛在があるからである。潛在には、例へば技術に於けるが如く、習得によるものと、例へば感覚に於けるが如く、先天的のものとがある。而して、後者は先に述べたる非合理的潛在と一致し、前者は合理的なるそれと一致する。處で、非合理的潛在に於ては、働きかけるものと、働きかけられものとが、その潛在に合適せる方法に於て一致したる時、一方が働きかけ他が之を受けると云ふ結果となる。然るに、合理的潛在に於ては、元來相背反

せる結果の可能性なるが故に、何れの結果を齎すべきかは、欲望又は意志によつて決定される。

以上吾人は『運動に關聯せる潛在』及び他の種類の潛在——而して之こそ吾人の研究せんと欲したる眞の對象であるが——も論じたのである。次に顯在に移らう。顯在 *ēnēpyēta* とは、例へば大理石材に於けるヘルメース神の像等の如く、吾々が潛在的に表現しないものの存在である。斯くの如き規定を以て、人はそれが定義でないからとて責むべきではない。蓋し、(一)『吾人の主張せんと欲する事は、各個の事象に於て歸納によつて明白であり、人は決して凡てのものの定義を求むべきではなく、寧ろ、類推的にも概觀しなければならい。』 *ōt̄lou d̄i ēn̄i kai, ēkast̄a t̄u ēπaγωγ̄ o Bouλόμεθα λέγειν, kai cū δεῖ παυτὸς ὅροις ζητεῖν ἀλλὰ kai τὸ ἀνάλογον συνορᾶν.* で顯在の潛在に對するは、恰も醒めるものの眠れるものに、視つゝあるものの眼はあるも閉じてゐる者に對するが如き關係である。が、概括して、顯在の潛在に對する關係は、運動の可能性への關係と實質の質料への關係の二種であると云へる。併し、又無限とか空虚の場合は、上の如き場合と異なる。蓋し、無限の如きは、それが顯在に於

て、客觀的存在を有つであらうと云ふ意味に於て潜在に於てあるのではなく、唯吾人の知識に於て潜在的にあるからである。全ての限界を有てる行動は完結ではなく、完結に相對的なる故、寧ろ、行動 *ヨハヨハ* とは云へまい。蓋し、行動とは、完結がその中に現前せる運動であるから。例へば、人は同時に見つゝあると共に見たと言へる。併し、この兩者は區別されなければならぬ。斯くて、後者は顯在であつて、前者は運動であると言はなければならない。運動とは全て未完結であるから。

以上に依つて、人は顯在が何であるかを把握しなければならない。次に、如何なる場合に、物が潜在に於て存在するかを考察しなければならない。第一に、技術的生産の如き場合に就て見んに、潜在に於て在ると云ふのは、働きかけるものがそれを欲求し、外的なる何物もこれを防げず、然も、働きかけられる者に於て之を防ぐる何物も存在せざる時に、初めて成立する。第二に、生成變化の根元がそのものの中にある場合に就て見んに、同様に、外的に之を防ぐる何物も存せざる場合である。此故に、例へば、土は潜在に於て人間ではないのである。

先行する *particular* に種々なる意義の存する事は、吾人の既に指摘した處であるが、

顯在は潜在に先行すると思はれる。實に、顯在は、定義上も、本質的にも、或意味で時間的にさえも、潜在に先行する。先づ、例へば建築し得ると云ふ事は、建築する事が出来る事を指すが如く、定義上顯在は潜在に先行する。次に如何なる意味に於て、顯在が潜在に時間的に先行なすかと言ふに、例へば顯在に於て存する一個人は潜在に於て存するものよりも時間的に確に後行的であらうが、然も、この後者を産み出せし者より見れば、後者が寧ろ後行的であると云はなければならない。蓋し、顯在に於て在る者が、潜在に於て在る者より産み出されるは、常に顯在に於て在る者に依つてである。『常に最初に動かすもの』がある。即ち、個體に於ては潜在が顯在に先行するが、種に就て考へれば、顯在が潜在に時間的にも先行するのである。第三に、本質上顯在は潜在に先行する。何故かならば、第一に、例へば人間が肉體に行はするが如く、生成に於て後行なるものは、實質上先行するものであり、又、凡て生成するものは、一定の目的に向つて動いて居り、顯在こそその目的なのであるからである。人が建築し得るのは、建築せんが爲であつて、建築し得んが爲に建築するのではない。更に、質料が潜在に於て在るのは、これ形相に到達せんが爲であつて、顯

在に於て在る質料とは、形相に於て有るものである。斯かる意味に於て、顯在は極在を意味し、斯くして、實質と形相も顯在となる。従つて顯在は潛在に先行するのである。更に、第二には、永劫的なるものは、死滅するものに先行するからである。

以上で以て、第八章の概括的敍述は打切るが、以上は、ハルトマンの云へるが如く、疑ひも無くアリストテレスの形而上學に於ける最も基本的な概念の問題法的展開である。寧ろ以上の如きが、アリストテレスの現實に示せる問題法であると言つてもいゝであらう。人は、このなかに種々なるアボリアの提出を洞察し得るであらうが、ハルトマンの言ふが如き明確なるアンティノミーは發見抽出し難いであらう。人は、唯、云はゞ多立的な、或は並立的なアボリアイと、その一律的な規定若くは規定への接近を發見し得るのみである。更に、此事は、次に略述すべき「形而上學」の中核とも稱すべき第五章全體の展望が確證して呉れる所である。前節に述べたる第二章は、確かに或種のアンティノミーの形態の摘出を許してゐる。然も、上の如く、最も基本的な形而上學的概念の把握に努力せる諸章に於て、明確なる二律背反を認め得ないとすれば、吾人はアンティノミーの曝露が問

題法の本質と断定する事は出来ないであらう。問題法は、要するに、種々なるアボリアを提出する事によつて、一定の規定に到達する、或は斯かる規定に接近せんとする努力的態度に外ならないのであつて、ヘーゲルの言へるが如く、結局は、(三)

Einfachheit des Fortgangs が問題法の本質的姿なのである。

(1) Metaph. 1048a 35

(11) Hegel, Vorlesungen, S. 315

六

確に、Z の章こそは、アリストテレスの「メタフィジカ」の中核を成してゐる。今吾人が此小論に於て主張せんとする所を更に確立せんが爲、その章の冒頭より第三節に至る迄の粗描に依つて、アリストテレスの問題法を如實に展開せしめ度いと想ふ。

『ある』と云ふ事は色々の意味に於て言はれ得る。例へば、質を指す場合もあり、量を指す場合もある。然し、根源的且つ純粹には存在は實體 *ousia* である。蓋し、存在

は根源的には『何であるか』*quid est* に歸着するからである。質とか量とかの他の範疇は寧ろ實體によつて有るのである。而して、實體は、凡ゆる意味に於て、即ち、定義上、知識の列序上、及び時間的にも始元的のものである。何故かならば、全ての定義には實體が含まれてゐなければならず、又、實體を知る時、吾人は他の如何なる範疇によつて知る時よりもより充分な知識を有つてゐるのであり、更に、實體以外の全ての範疇は之を俟つて始めて存在し得るからである。

さて、實體は色々に考へられてゐるのであつて、或者は物理的物體を、又我者は點・單位等の如き物體の限界を、更に或人々は、例へばプラトーンのイデアの如く、言はゞ永劫的本質をウーリシアと稱してゐる。(二)『吾人は、是等の見解に就いて、その何れが正しき論述であり、何れが然らざるかを、如何なる實體があるかを、果して可感的なるもの以外に何等かの實體があるか否かを、之等の可感的實體が如何に存在するかを、又果して、可感的實體と隔絶したる何等かの實體があるか——何故に又如何に——或は全然無きかを検討しなければならない。』

實體は少くとも四通りに云はれてゐる。即ち、本質 *essentia* 普遍、類、及び基體

*ὕποκείμενον*としてである。基體とは、他の總てのものがそれの下に云はれるものであつて、それ自らは他のものの下に云はれないものである。斯かる意味に於て基體は質料、形相及びこの兩者の結合體なる三つの意味に言はれてゐる。例へば、影像に於て、赤銅が質料であり、形相とはその外見であり、兩者の結合體とはその具體的總體なる影像そのものである。故に、基體が實體であると云ふならば、先づ質料が實體となるであらう。然し、之は不合理である。何故かならば、質料とは明かに他の全てのものが剥奪されて尙ほ其處に殘留するものであり、實體は寧ろ質とか量とか全ての範疇が根源的に歸屬する處のものであるから。更に、質料が個物でもなく、何等かの分量でもなく、又他の範疇に依つて規定されてゐるものでないに對し、實體の特性は、何よりも獨立的存在性と個體性 *αὐτός* であると見られるからである。斯くて、寧ろ形相及び形相と質料の統體が實體なりと考へられ得るであらう。然し、この統體はその本質上『より後の且つ明白なるもの』であるから、今これに觸れずして、最も困難なる *ὑπορεάτη* 形相の問題に進まう。特に、形相を一般に認容されてゐる感覺的事物の中に求めて行かう。蓋し、知識は、(二)『吾々自身に

とつてより知られ得るものより出て、その本質に於て知られ得るもの、吾々自身に知られ得るものたらしめる』事にあるからである。

人は、アリストテレスの全著作を通じ、以上の短き章句に於て、恐らく最も直截的に彼の問題法を把握し得るであらう。否以上の章句に現れてゐるが如き方法を除いて外に、人はアリストテレスのアポレティクを求むべきではない。

アリストテレスに於けるアポレティク——寧ろ *aporetische Methode* と稱すべきであると考へるが——とは、要するに、(三)等しく推理の結果にして然も相反せる數個の憶測の呈露とその解決であつて、之が常に凡ゆる學的研究の出發點となつてゐる。例へば「自然哲學」第一章「デ・アニマ」第一章「形而上學」第一章第二章等その好例である。而して、眞なる學的認識は、斯かるアポリアの解決に存するのであるが、アリストテレスはこれを *euporeia* と稱してゐる。ユウボリアとは、單に通路の開けるを意味し、アポリアの解消を意味するのであつて、毫末も止揚に依る綜合を意味するものではない。アリストテレスの所謂ディアレクティケーなるものの一つの任務は、斯かるアポリアの呈露であつて、其意味に於て、彼のアポレティクは

彼のディアレクティケーと一致すると言へるであらう。然し、注目すべきは、彼のアポレティクもディアレクティケーも、直ちにそれ自ら眞なる學的認識を意味せずして、寧ろそれへ到達の一つの方法と考へられてゐる事である。アリストテレスにとつて、哲學は飽迄一律的規定を目指すものであつて、それが彼の言ふディアレクティケー及びソパイステイケーと異なる所以である。即ち、ディアレクティケーが試験的乃至推測的にして、ソパイステイケーが假裝的なるに對し、哲學は一律的なる積極的斷定的知識 *Wissenschaft* であると言はれてゐるのである。

此處に於て、吾人は、以上と關聯し、ヘーゲルの論理學に於ける所謂論理的なるものの三側面を想ひ起さなければならぬ。即ち、ヘーゲルに依れば、論理的なるものは、形式上抽象的或は悟性的 *abstrakte oder verständige* 紛證法的或は否定的一—理性的 *dialektische oder negativ-vernünftige* 及び思辨的或は肯定的一—理性的 *spekulative oder positiv-vernünftige* の三側面があると云ふ。而して、(四)「悟性としての思惟は、固定的な規定及びそのものの他の規定に對する區別として止つてゐる。斯かる限定されたる抽象が悟性としての思惟にとつて、それ自身に存立するものとなつ

てゐる。』と述べてゐる。アリストテレスの哲學の論理はまるに斯かる側面に終止してゐると云へないであらうか。アリストテレスの問題法の出發點も目標も、これ全く斯かる一律的なる固定的規定性 *feste Bestimmtheit* に外ならないからである。但し、一般に辯證法なるものと現實存在及び本質存在との關係、並びにヘーゲル辯證法とこの問題との關聯、延いては、アリストテレスの存在論の本質とこれらの問題との關係は、何れも重要なテーマであるが、吾人は只管アリストテレスの問題法に注意を集中し度いと思ふ。

ハルトマンは、質料、形相、運動、顯在等の諸概念に於ける二律背反的なるものを剔除し、以て、問題法をヘーゲルの辯證法に結合せしめんとしてゐる。併し問題法は、要するに、一方向に進めば、其路は或點で窮つて居り、前進を許さざるが故に、前進せんが爲に、更に新なる方向を辿り、此路も亦窮まれば、更に新なる道を求めると言ふ態度に外ならないのであつて、決して、全體が一つの不斷の流れをなすと云ふが如きものではない。(五)ジエントイーレの言葉で云へば、ヘーゲルの論理が *la dialettica del pensato* であ

るとも言へるであらう。勿論、其處にはヘーゲルのモメントもなければ、アウフヘーベンもシンテーゼも無い。唯單に二個の相背反せるものを曝露するのみが、況んやその矛盾を止揚によりて綜合する事が、問題法では決してない。ハルトマンは、結果に於て、二律背反が現れてゐると言ふであらう。併し、既に指摘したるが如く、その彼が二律背反的なるものと稱してゐるものも、決してヘーゲルのアンティノミーではない。例へば、ハルトマンは、アリストテレースの運動概念に於て、(六)『運動は潛在に於けるものの、そう云ふものとしての顯在である。』と規定されてある事より、其處にアンティノミーの存する事を、一つの好例として指示してゐるが、顯在と潜在が果して辯證法的アンティノミーと云へるかどうか。此事は、今假りに、ヘーゲルの論理に於ける有論の有無成の辯證法に當嵌めて見れば、或種の興味ある一致を發見し得る。即ち、この辯證法に於ける有と無は、アリストテレースから云へば、何れも顯在に於てあるものであつて、成こそこの兩者の顯在である。蓋し、ヘーゲルは、(七)『無はこの直接的な自己同等なるものとして、又逆に有である處のものと同一である。故に、有並びに無の眞理は兩者の統一である。此統一は

成である。』と見て居り、又、アリストテレスは、顯在は潜在の目的——言はば眞理——であり、然も逆に潜在は顯在の目的ではなく、顯在は常に定義上、本質上及び時間的にさえも潜在に先行する、と主張してゐるからである。斯くて、これら二概念はヘーゲル流のモメントとしてのアンティノミーとはどうしても考へられないのであつて、此處に於ても、兩者對立の解決は常に一律的と云ふべく、この兩者に縦しアンティノミーが成立するとするも、そのアンティノミーは、それら二概念のうちの云はゞ價値的に優越するものに解消すべきものである。アリストテレスが運動を、單なる可能性と規定せずして、可能性としての可能性の完成としたるは、まさにこれによるのである。以上の事は、質料、形相、「第一の動かすもの」等の、ハルトマンの指摘せる凡ゆる概念に就て云ひ得る事なのである。

アリストテレスの問題法が以上の如きものであるとすれば、更に、ヘーゲルの辯證法をヘーゲル自身によつて解するならば、寧ろハルトマンの論文自らが明示せるが如く、人は、この二者を哲學方法上に於て、本質的に『結合する』契機を何處にも發見し得ない筈である。一は外面向なる概念の規定に終始するに對し、他は概

念の内面的流れそのものである。一は飽迄方法たるに止るが、他は方法以上に出するものである。唯、ハルトマンの如く、問題法の本質を二律背反の曝露とその積極的尊重に求め、辯證法に於ける綜合を輕視する限り、人はこの結合を容易に成就し得るであらう。否、ハルトマン自らのアポレティクに於て、アリストテレースとヘーゲルを合流すべく餘儀なくせしめる事は誠に容易であるとさえ云ふべきである。

寧ろ、人は、ヘーゲルの辯證法と、アリストテレースの問題法との間に介在するもつと根本的な本質的差異に着目しなければならない。ヘーゲル哲學の理解は實に、ヘーゲルの辯證法の把握——よし此事が誠に容易ならざる企てであるとするも——なくしては、明かに不可能である。これ、辯證法が、ヘーゲルの言へるが如く、(八) das Prinzip aller natürlichen und geistigen Lebendigkeit überhauptなるによる。彼の辯證法が、内容の如何に拘らずして、常に當嵌め得る抽象的圖式でない事は、誰よりもハルトマンの最も強く力説する所である。辯證法が方法以上の或物であつて、分析と綜合、演譯記述と本質洞観、類推的反省と組合せ論等の方法が、全てその根柢

に於て schematisch なるに對し、辯證法のみが然らざる事は、(九)ハルトマンの正當に主張する處である。實に、ヘーゲルにあつては、眞なる認識に達する方法としての辯證法的思惟はイデーの自己發展の過程と合致するのみならず、概念の發展即實在の自己展開なるが故に、ディアレクティクは思惟發展の法則であると共に、實在發展の法則となつてゐるのである。然るに、アリストテレースのアポレティクは眞なる認識到達の方法以上の或物と見る事が出来るであらうか。ヘーゲルに於ては多義多様なる辯證法の把握が、その哲學の理解であると云ひ得るが、アリストテレースに於ては、事情が逆なのではなからうか。アリストテレースにあつては彼の哲學の理解がその問題を把握せしめてゐるのであつて、又、彼の問題法とその哲學體系の理解は、本質的に繋がり合つてゐないと云ふ事が出來やう。彼にあつては、問題法は、要するに、字義通り一個の *Wort* であり、研究に當つて從つて行くべき途なのである。従つて、一つの抽象的圖式を有ち得るものもある。恐らく、これはアリストテレースの方法が、ヘーゲルの明察せるが如く、(十)一面に於て經驗的と考へられる』事によるのであらう。人は、アリストテレースの言はゞヘーゲル

化を企てる前に、先づ以上の根本的差異に注目すべれである。

斯くて、吾人は、ヘーゲルのハルトマン化とも言ふべき問題にも論及すべりであらうが、これは他日に期する事として、今は、ハルトマンによるアリストテレンースのヘーゲル化或はアリストテレンースのハルトマン化と稱し得るもの指摘したる事を以て、最初に吾人が掲げたる課題に解答したるものと見做し度い。

そして、最後に、アリストテレンースの問題法とヘーゲルの辯證法との關係の理解に、多大の暗示を與へてゐると思はれる次のヘーゲルの言葉を、おれにサンチャロペディアがアリストテレンースの引用に終つてゐる例の逆を行つて、(+)『法律哲學』より引用して擗筆する。

Das bewegende Prinzip des Begriffs, als die Besonderungen des Allgemeinen nicht nur auflösend, sondern auch hervorbringend, heisst ich die Dialektik,—Dialektik also nicht in dem Sinne, dass sie einen dem Gefühl, dem unmittelbaren Bewusstsein überhaupt gegebenen Gegenstand, Satz u. s. f. auflöst, verwirrt, herüber und hinüber führt und es nur mit Herleiten seines Gegentheils zu thun hat,—eine negative Weise, wie sie häufig auch bei Plato erscheint.

heint. Sie kann so das Gegentheil einer Vorstellung, oder entschieden wie der alte Skeptizismus der Widerspruch derselben, oder auch matter Weise eine Annäherung zur Wahrheit, eine moderne Halbkeit, als ihr letztes Resultat ansehen. Die höhere Dialektik des Begriffs ist, die Bestimmung nicht bloss als Schranke und Gegentheil, sondern aus ihr den positiven Inhalt und Resultat hervorzubringen und aufzufassen, als wodurch sie allein Entwicklung und immanentes Fortschreiten ist. Diese Dialektik ist dann nicht äusseres Thun - eines subjektiven Denkens, sondern die eigene Seele des Inhalts, die organisch ihre Zweige und Früchte hervortreibt.

- (1) Metaph. 1028^b 27
- (11) Metaph. 1029^b 7
- (III) Top. 145^b 17, 162^a 17
- (E) Encyclopädie. Lessons Ausg., S. 105
- (H) G. Gentile, La riorma della dialettica Hegeliana, P. 5 ff
- (K) Physica, 201^a 11
- (P) Encyclop., S. 110
- (K) Wissenschaft der Logik, Lessons Ausg., S. 38
- (K) N. Hartmann, Hegel, S. 183
- (+) Vorlesungen über die gesch. d. philos., S. 315
- (+ 1) Philosophie des Rechts , glockns. ausg., S. 81